

# 目次

第 1 章	はじめに	2
第 2 章	環境構築と初期設定	3
2.1	L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X を使うのに必要なもの . . . . .	3
2.2	T <sub>E</sub> XLive の導入 . . . . .	4

# 第 1 章

## はじめに

お手に取って頂きありがとうございます。

みなさんは  $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}^{*1}$  というソフトウェアをご存知でしょうか？  $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  とは  $\text{T}_{\text{E}}\text{X}^{*2}$  を元に開発された文書作成ソフトウェアで、編集している画面が出力として得られる Microsoft Word などのソフトウェアとは対照的に  $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  の文書はプログラミング言語のような形で命令と文章を記述し、タイプセットと呼ばれるコンパイルを行うことで PDF 形式での出力を得られる、という形の文書作成システムです。

このような形式は一見面倒に思えますが、自動で段落や目次の生成を行えたり、強力な図形描画機能を備えている点から、レポートはもちろん論文の執筆で威力を発揮します。また美しい文書を作成できることでも評価が高く、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  を用いた書籍も多数出版されています。もちろん本書も  $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  で作成されています。

本書では、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  の基本的機能から、レポート執筆に便利なグラフの生成や回路図の生成が可能になる拡張機能の使用法の解説、またソースファイルの差分管理など運用面の内容も交えて解説します。

本書が読者のレポート執筆の一助となれば幸いです。

---

\*1 ラテック/ラテフ、英語圏ではレイテックとも読まれる

\*2 テック/テフと読む、テックスは誤り

## 第 2 章

# 環境構築と初期設定

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を使うにあたり最も大きな障壁とされるのが環境構築<sup>\*1</sup>とされています。確かに Microsoft Word などと比べれば導入は少々煩雑ではありますが、多くの方々の尽力により今ではとても簡単になっているので、身構えることはありません。

### 2.1 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を使うのに必要なもの

まず、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のソフトそのものが必要になりますが、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X は単体のソフトウェアではなく、多くの関連ソフトの集合体です。それらを一つ一つ導入していくのはとても手間がかかるので、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X では関連するソフトをひとまとまりにした状態で配布するディストリビューションという形態がとられています。現在配布されているディストリビューションにも数種類あるのですが、現在最もポピュラーな T<sub>E</sub>XLive というディストリビューションを今回使用します。

また L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X は、マークアップ言語と呼ばれるプログラミング言語のような形で文章の構造を指定します。そのため L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を使うためには L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 本体ソフトウェア以外にもマークアップ言語を記述するためのテキストエディタが必要になります。T<sub>E</sub>XLive にも一応 T<sub>E</sub>XWorks というテキストエディタが同梱されているのですが、お世辞にもモダンとは言えません。ですので、今現在 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X に限らず多くのプログラミング言語の開発環境に用いられている Visual Studio Code というエディタを使用します。

今回インストールするソフトウェアは以下の 2 つとなります。

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ディストリビューション T<sub>E</sub>XLive

テキストエディタ Visual Studio Code

これらのソフトウェアの導入手順を以下にて解説します。

---

<sup>\*1</sup> そのソフトを使える環境を整えること

## 2.2 TeXLive の導入

まず最初に TeXLive を導入します。

### 2.2.1 Windows

以下のページよりネットワークインストーラをダウンロードします。

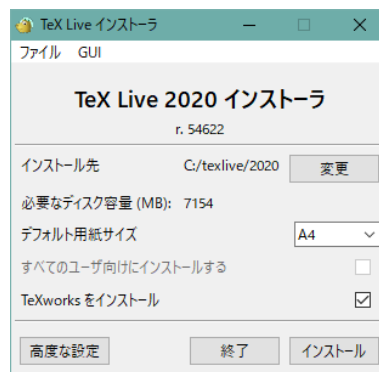
<https://www.tug.org/texlive/acquire-netinstall.html>

このページを開いて、install-tl-windows.exe をダウンロードします。

ダウンロードしたファイルを起動すると展開用のソフトが起動するので、install を選択し次に進み、install ボタンを押下します。すると右のようなインストーラが起動します。ここで様々なインストールの設定が行えますが、たいいていの場合変更は必要ありません。インストール先もこの設定で変更が可能ですが、本書では変更しないという前提で解説をします。

インストールボタンを押下するとインストールが開始されます。かなり時間がかかるので放置しておきます。

終わったらインストーラを閉じてインストールは完了です。



### 2.2.2 Linux

Debian,Ubuntu など

パッケージ管理ソフトを使用するのでまず最初に更新を行います。以下のようにしてパッケージとリストを更新します。

```
$ sudo apt update
$ sudo apt upgrade
```

更新したら、以下のようにして TeX Live と関連ソフトウェアをインストールします。

```
$ sudo apt install texlive-lang-japanese ghostscript perl
$ sudo apt install evince poppler-utils poppler-data
$ sudo apt install texlive-fonts-recommended texlive-fonts-extra
```

以上で完了です。

### Arch Linux など

Ubuntu などと同様にパッケージリストを更新します。

```
$ sudo pacman -Syu
```

更新したら、同様に以下のようにして TeX Live と関連ソフトウェアをインストールします。

```
$ sudo pacman -S texlive-langjapanese texlive-most  
$ sudo pacman -S ghostscript perl  
$ sudo pacman -S evince poppler-utils poppler-data
```

以上で完了です。